

一 色 青 海 遺 跡

調査経過 一色青海遺跡は中島郡平和町須ヶ谷および稲沢市儀長町に所在する。遺跡及びその周辺は、三宅川により形成された標高1 m前後の自然堤防と、その後背湿地に該当する。

今回の調査は、日光川上流流域下水道浄化センター建設に伴う事前調査として、昨年度からの継続事業として実施している。本年度の調査は総面積3908㎡で、これを94 A区～F区の6地区から分割して実施した。それぞれの面積は、94 A区 (736㎡)、94 B区 (1088㎡)、94 C区 (1486㎡)、94 D区 (214㎡)、94 E区 (192㎡)、94 F区 (192㎡) となるが、具体的な作業は、排土などの関係からこれらをさらに13地区に細分して実施している。なお、調査期間は4月～8月と、12月をこれに充てている。

調査概要 調査の結果、検出できた遺構は、弥生時代中期末と鎌倉・室町時代と江戸時代の三時期にまとまりをみることができる。ここでは弥生時代中期末の遺構をA期、鎌倉・室町時代B期、江戸時代をC期と呼称する。以下、調査区毎に概観する。

94 A区 94 A区は93 E区を挟んだ細長い調査区である。93 E区の東側に所在する94 A a・94 A b区、西側に所在する94 A d・94 A e区に区分する。確認できた遺構はA期とB期に帰属する。まずA期の遺構であるが、94 A a・94 A b区では、A期の土坑、溝などを多数検出している。作業開始当初は93 D区で確認できた谷地形が、遺構遺物とも希薄となっていたことを考え、ここが遺跡の限界部分に該当することを予想していたが、遺構はさらに東側にも分布していることが確実と考えられる。また、94 A e区ではA期の土坑を中心とした遺構が集中している。調査区の制約から、建物などの検出はできなかったが、居住域としての性格を考えることができる。次にB期の遺構は全体に希薄となるが、94 A d区で方形土坑の集中域を確認している。

94 B区 94 B区は今回最も西側に所在する調査区である。確認できた遺構はA期とC期に帰属する。まずA期の遺構であるが、竪穴住居を1棟確認している。平面形は隅丸方形を呈するが、後述するC期の溝に東側と南側を破壊されている。埋土からは多数の弥生土器が出土している。94 A e区の成果も考慮すると、94 B区は、A期の居住域の西端部分と考えられる。次に、C期の遺構は、溝を1条確認している。この溝は比較的大規模な遺構で、94 B b区を斜方向に走行し、幅5 m、検出面からの深さは0.4 mをはかる。

C～F区 C～F区はいずれも93 C区の周囲に接して設定されているため、ここでまとめて報告する。各調査区の位置は94 C区が93 C区の北側、94 D区が南側、94 E区が東側に位置し、94 F区は93 C a区と93 C b区に挟まれる位置に該当する。ここではA期とB期に帰属する遺構を確認したが、いずれも93 C区の様相とよく一致している。今回検出したA期の遺構は、平面形が円形ないし楕円形で、検出面からの深さが0.5 m程度をはかる土坑に代表される。このうちいくつかは埋土から炭化物に混在して土器片が多数出土している。また、この炭化物には植物種子なども含まれており、これらは廃棄土坑とも推定できるのかもしれない。

次にB期の遺構は、方形土坑を検出している。方形土坑は93C区で「方形区画」と「集中区」を形成していたが、これらの分布の状況などの特色は、昨年度の成果とよく整合する。このうち集中区は新たに94D c 区の東側や94F区に確認できた。

まとめ 本年度調査区は、昨年度調査区の周辺部分に設定された関係上、昨年度の成果と概ね一致をみた。

今回検出できた遺構は、弥生時代中期末の溝・土坑や、鎌倉・室町時代の方形土坑、江戸時代の溝などがある。なお、弥生時代中期末の遺構は、A区の西側部分で、柱穴の可能性をもつ小土坑や廃棄土坑が集中する傾向が確認でき、居住域となる可能性が強い。ただし、A区が幅2m～5mの細長い形状である関係上、遺構の性格・形状などの把握は困難となる。以下、時期別にこれをまとめる。

A期 A区では、調査区の形状から建物の検出はできなかったが、居住域としての性格を考えることができる。平成三年度に調査が実施された一色長畑遺跡を含んだ範囲を、A期の居住域として理解することが妥当であると考えられる。ただし、比較的まとまった面積に及ぶB区では竪穴住居が1棟のみの検出にとどまることから、今回の調査区はその外縁部分であることが考えられる。

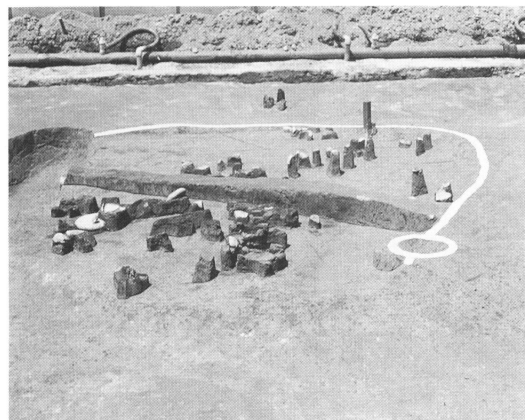
B期 B期の遺構は、各調査区を通じて方形土坑を検出している。遺構分布の調査区に限定して考えると、北側部分に希薄で、南側部分に群集している。方形土坑が集中する南側部分では、これらが方形区画や集中区を形成するほか、分布の濃淡も確認できる。

C期 C期の遺構は明瞭なものとしてB b区で溝が1条確認できたに過ぎない。また、そのほかの遺構が散発的で、これらを遺構群として把握できるものではない。一色青海遺跡は、B期とC期の間に属する遺物がほとんど確認できないことから、この間遺跡が荒廃していることも考えられる。ここでは一色青海遺跡で江戸時代に再び遺構の構築が確認できることを評価し、同時代に各地で活発化する新田開発事業に関連したものである可能性を考えておく。

(池本正明)



B区全景



竪穴住居 (B区)



C、D全景